

特集

日本語力を考える

「近ごろの学生は日本語が書けない、話せない」などなどの愚痴がそこかしこで聞かれるようだ。電子メールや携帯メールの日常化や情報のグローバル化などによってか、ここ数年の若い世代の日本語はずいぶんと変わってきたと感じている。日本人でありながらことさら「日本語が」と使う人には、意識の底に本来のあるいは正調の日本語があるのかも知れない。日本語力を日本語による表現能力などを含んだよりひろい概念と考えてみた。そして、あえて国語力としないで日本語力というコトバをつかって、外国人教師・留学生からの意見もいただいでみた。

読んでみて「それほどでもないじゃないか」と感ずるか、「やはり」と思い当たるか、編集側は興味あるところである。平成13年度筑波大学年次計画の「学群共通教育と教養教育の実施体制について検討し、その改善を図る」という項目のインフラをさらってみようとしたのであるが、いかがなものになったのであろうか。

日本語教育のあり方について一私思うこと

工藤博幸

電子・情報工学系助教授

言語には「コミュニケーションの手段」と「各国の文化・伝統・習慣などを形成する基礎」という二つの異なる意味がある。車の両輪のように両者のバランスがとれた教育が理想的な日本語教育であると思う。このような観点から日本語教育のあり方について私が思うことを述べる。

『コミュニケーションの手段』としての日本語教育は小学校や中学校では比較的上手く行われている。小学校や中学校では字の読み方・書き方から始め、読書感想文などの文章を作成したり自分の考えを発表する機会が十分に与えられている。しかし、高校以降大学4年まで日本語教育に値するものは実質的にほとんど行われていないに等しい。高校の現代国語は文章の背後に隠れている作者の考えや意図を問う内容がほとんどで、これは日本語教育とは異質のものであるように思う。字の読み・書きは中学校まででほ

ぼ終了しているという理由であろうが、日本語を自由自在に使いこなす上達するには読み・書きに加えて自分の考えや意見を整理して文章にしたり発表したりする継続的な訓練が必要である。この最後の部分が現在の日本語教育には大きく欠けているように感じられる。私は共通一次試験が始まって間もなく大学受験を行った世代だが、高校以降大学4年まで自分の考えや意見を文章にしたり発表したりする機会はほとんど与えられなかった。そのような訓練ができていない状態で大学4年になって数十ページの卒業論文を書くことを強いられるのであるから、多くの学生が思ったように良い論文が書けず指導教官が『最近の学生は文章を書くのが下手だ』と嘆くことになるのは当然である。しかし、大学院に進んでセミナーなどを通して訓練を始めればやはり日本人なのだから上達は早く、支離滅裂な文章を書いたり主語と述語が一致

しない発表をしていた学生が二年後には無難にこなすようになる。これは、学生自体は本質的に日本語の能力があるのに訓練不足がたたっているからであろう。「もう少し早い時期から訓練を行ってれば」と毎年学位論文提出の時期になる度に思う。そこで、高校から大学3年までの時期に自分の考えや意見を文章にしたり発表したりすることを継続的に行う教育を取り入れれば効果的であると思う。テーマは文化系・理科系の相違や各学類の専門性を考慮して学生が興味を持てるようなものを選べばよい。例えば、私が教育を担当している情報学類では、二年ほど前に学生が自分で選んだテーマについてプログラム作成や実験を行いレポートにまとめ受講生全員の前で発表するという形式の『情報特別演習』という科目を設置した。このような様々な工夫を高校や大学のカリキュラムに取り入れていけば、「コミュニケーションの手段」としての日本語能力の低下はかなり防げるのではないだろうか。また、添削などの教官から学生へのフィードバックも重要である。中学校までは先生が細部まで文章の添削をしてくれるが、高校以降ではレポートや論文を提出してもコメントなしのものが返ってくる場合がほとんどである。学生側に立ってみると、どこが

悪いのかが分からなければ次回に直しようがない。

さて、コミュニケーションの手段を教えるだけの日本語教育だけでは十分であろうか。言語を単なるコミュニケーションの手段と考えるのであれば、敬語の絶滅、画数の多い漢字の簡素化、英語をカタカナに直しただけの単語の使用、などの日本語の簡素化や形のくずれが進み、正しい日本語が使えない日本人が増えてくるのは当然である。また、日本語を自国の言語として誇りに思わない日本人が増えてくるのも当然である。二人の知り合いのフランス人研究者に「何故フランス人は英語を話すのを嫌がるのか」という質問をしたことがある。答えは「フランス語はフランスの文化であり誇りに思っているからだ」という単純なものであるが、同様な答えができる日本人はどの程度いるのだろうか。そして、先に述べたような風潮が強くなれば「文化・伝統・習慣などを形成する基礎」という言語の意味合いが薄れ、日本の文化・伝統・習慣に悪い意味での大きな変化を起こすことも考えられる。皆が意味が通じるだけの最低限の日本語を使いその背後に文化や伝統が何も感じられない国は良い国ではないであろう。そこで、日本語を自国の言語として誇りに思い大切にする風

潮を生み出すような日本語教育をなるべく早い時期から継続的に行うことが必要であると思う。例えば、私がイメージとして抱いている具体的な案として以下のようなものがある。科目名を『日本語』とする。内容としては、(1) 言語学的に見た日本語、(2) 日本語と他国の言語の相違、(3) 日本語の歴史、(4) 詩・民話・童話・古文・俳句などの日本語から生まれた文化、などのあまり実用的でないことから、(1) 文法や字の読み書き、(2) 敬語の使い方、(3) 文章や手紙の書き方、(4) スピーチや挨拶の仕方、(5) 書道や字の練習、(6) コンピュータなどの情報機器による文書作成、などの実的なことまでを含めてよいであろう。これらの内容を年齢に応じて振り分け継続的に日本語を教えるようにするのである。上記の項目の幾つかは現在の教育にも取り入れられているが、様々な日本語に関連するものを『日本語』を前面に出して体系的に教えることで日本語に関する従来とは異なる価値観が生まれてくることが期待できる。例えば、日本語は外国語と対等以上の存在であるという意識や誇りを生み出すであろう。また、この科目は、文章を読んでその背後に隠れている作者の考えや意図を問う文章読解的な内容の『国語』とは別の科目とすべきであ

る。

最後に、コンピュータの導入と日本語教育の関係について述べる。コンピュータを用いた文書作成は便利なもので日本語教育の一部として取り入れるべきであることは言うまでもなく、今後様々なソフトウェアが開発され日本語の読み・書きに貢献していくこと間違いない。しかし、読み・書きをコンピュータで行うようになると、ユーザの日本語能力に何らかの影響を与えるであろう。例えば、多くの人が感じているように、漢字が書けなくなる、丁寧に字を書くのが億劫になる、便箋に手紙を書こうと思ったがなかなか上手く書けない、などの現象である。また、コンピュータは人間の作業を補助するという位置づけである筈なのに、『コンピュータが全部やってくれるから人間は漢字が書けなくとも手紙や挨拶状のフォーマットが分からなくともよい』などの奇妙な風潮が出てくるとも危惧される。コンピュータが導入されて数十年の間は人間の日本語能力にどのような変化があるかを追跡し、人間の日本語能力が低下しないように定期的に日本語教育に軌道修正を施していく必要があると思う。コンピュータを教える情報学類の教官としては、上述のコンピュータの短所が適切な日本語教育により補われ

コンピュータの長所のみが生き残ることを願う。

英語教育の重要性や改善に関する議論は多く行われ成果を挙げ、実際に英語教育は昔と比較して驚くほど盛んになり質も着実に向上している。しかし、本文を執筆するにあたりインターネットを調べてみたが、日本語教育に関する議論は留学生などの外国人を対象としたもの以外ほとんど行われていないようである。それが具体的な症状として現れてきたのが

最近の学生の日本語能力の低下であろう。症状が軽い今のうちに何らかの手を打てばまだ回復可能なはずである。筑波大学は、総合科目の導入や共通科目情報処理のいち早い導入など基礎教育のあり方について手本を示した大きな実績があり、日本語教育のあり方についても筑波大学が主導で何か貢献できるのではと大きな期待を抱いている。

(くどうひろゆき 電子・情報工学)

